

## 社会学の導入教育における授業連携に関する予備的調査研究

杉野 昭博 ・ 永井 良和 ・ 大和 礼子 ・ 間淵 領吾

### A study on the co-ordination of introductory courses in sociology

Akihiro SUGINO, Yoshikazu NAGAI,

Reiko YAMATO, Ryogo MABUCHI

#### Abstract

Although Japanese sociologists are currently concerned with the methods and the outcomes of their teaching, no study has been made in terms of what individual professors actually teach in their classes and how far those classes are coordinated with each other. The four authors of this paper report what they teach in the introductory courses of sociology, and explore ways for better co-ordination through mutual review of their course contents. Furthermore, a half of the first-year students registered at the department of sociology were asked how far those introductory courses were coordinated with each other and helped them to understand sociology. The study shows that although the courses are coordinated to some extent there is much room to improve the current course contents.

Key words: sociology, course program, co-ordination

#### 抄 録

近年、社会学教育に関する研究がいくつかおこなわれてはいるが、授業間の連携について研究調査したものは見あたらない。各教員の個別の指導内容にまで踏み込んで、調査研究したものはこれまでおこなわれていない。そこで、本研究では、研究代表者および分担者の全員が、それぞれ担当する社会学の導入科目における指導内容について詳細に報告し、これを相互に評価しあうことから始めた。その結果、「社会学の基礎概念」の指導と「データの読み方・集め方・提示の仕方」に関する指導において、授業連携がとくに必要であるという認識にいたった。

一方、学生がこれらの科目間の連携をどのように認識しているのか調べるために、質問紙調査をおこない、これを分析した。この結果、学生たちは、導入科目間の連携を意識してはいるものの、個別の内容に関しては漠然とした意識しかもっておらず、指導内容に関してやや満足していない様子もうかがえた。

このことから、社会学の導入教育における授業連携については、今後も十分に改善の余地があることがわかれるとともに、授業連携を強化していくことによって教育効果が高まる可能性が大いにあることが示唆された。

キーワード：専門教育・導入教育・社会学・授業連携

## 1. 関西大学社会学部における専門教育導入科目の概要と経緯

関西大学社会学部社会学科社会学専攻のカリキュラムでは、1年次において、教養科目、外国語科目と並んで専門科目の導入科目の配置に留意している。この専門科目の導入科目の単位数は、カリキュラム上は「教養科目」として配置されている「社会学(社会学入門)」・「社会学(現代の社会)」をあわせると、最大28単位にのぼり、1年次の履修上限単位数の半分に達している(表1参照)。他の3専攻においても、若干単位数は異なるものの、ほぼ同様の導入科目が設置されている。専門科目の導入科目は、今日では他大学においても珍しくなくなったとはいえ、1年次からここまで専門科目を配置している大学・学部は決して多くはなく、本学部におけるこのような特色ある取り組みには歴史的背景があることも見逃せない。

関西大学社会学部社会学科社会学専攻における専門教育の導入科目の歴史を振り返るならば、学部創設2年後の1969年度の「学習要項」において、「履修・修得について特に注意すべき事項」という項目のなかで「社会科学系列中『経済学』『社会学』および自然科学系列中『心理学』は必修科目ではないが、社会学部における専門科目履修上基礎となる大切な科目であるから履修することが望ましい」という記述が登場したのが最初だろう。この時点から、一般教育科目の経済学・社会学・心理学を専門基礎科目として位置づけた上で、1年次生に対して履修指導をしている。こうした考え方が、カリキュラム上明確になるのは1974年度以降である。この年度の科目表には、一般教育科目とは別に「基礎教育科目」という欄が設けられ、社会学と心理学各4単位が4専攻共通の必修科目として表記されており、一般教育科目の必要単位数が前年の36単位から28単位に減算されている。社会学が基礎教育科目となった1974年度講義要項を見ると、担当者は前期が前田卓・神谷国弘、後期が岡田至雄・雀部猛利となっており、講義概要として「社会学とはどのような学問であるかという理解への導入を行うため、前田、神谷、岡田、雀部がそれぞれに社会学に関する主要事項を分担し、社会的行為、社会関係、社会集団、社会組織、文化、現代社会などに関する社会学的思考法について触れると共に、社会調査法や社会病理現象などについても講述する」と記されている。学部草創期から、「専門教育への導入」の必要性が意識されていることがうかがえる。

学部のすべての1年次生に対して、社会学と心理学を必修科目として課す体制は1987年度まで14年間続く。その後1988年度には、大幅なカリキュラム改訂が行なわれ、社会学と心理学は一般教育科目に戻され、それぞれ社会学専攻と産業心理学専攻の必修科目となり、

それ以外の専攻においては選択科目という位置づけに変わる。また、1988年度から1年次「基礎研究」、2年次「文献研究」（産業心理学専攻は「心理学研究」）、3年次「演習」、4年次「卒業研究」という、4年間にわたる少人数ゼミ指導体制が編成され、単位数もすべて4単位に統一され、合計16単位が必修となる枠組みが作られた。これは教務編成上は、学部創設当初から全学的に2・3年次に配当されていた必修科目の「英書講読1」「英書講読2」を、「基礎研究」および「文献研究」に編成しなおしたものと考えられる。他学部にも先駆けて社会学部で、このような「導入ゼミ」が設けられた背景としては、社会学部ではすでに1970年度から独自に「英書講読1」を1年次に配当していることが注目される。この当時から社会学部では、1年次における「基礎的講義」と「少人数講読クラス」の必要性が意識されていたのかもしれない。

こうして1988年度に1年次配当の「基礎研究」が、翌1989年度には2年次配当の「文献研究」が置かれるが、当初は「基礎研究」でスタディ・スキルやプレゼンテーションの指導がおこなわれ、「文献研究」では旧来の「英書講読」の内容がある程度引き継がれていたようである。

その後1997年度にさらなるカリキュラム改訂がおこなわれ、2年次「文献研究」が「基礎演習」に名称変更されるとともに、1988年度から産業心理学専攻の1年次に設置されていたオムニバス講義（「心理学総合研究」）が、他の3専攻でも「社会学総論」「マス・コミュニケーション総論」「産業社会総論」として設置され、それぞれの専攻ごとの必修科目となった。また、この年、学部創設以来の2年次配当の「選択必修科目」が廃止されたために、専門選択科目全般が配当年次を繰り下げることになり、社会学専攻では、「現代社会論」と「産業社会学」の2科目が1年次配当の選択科目となった。

2002年度には Semester 制が導入され、1年次の「基礎研究」通年4単位が、「基礎研究1」と「基礎研究2」の2単位ずつに分割されるとともに、2年次の「基礎演習」通年4単位は、春学期2単位だけの科目へと圧縮された。また、2005年度からは社会調査士資格の関係から、「社会調査論1」「社会調査論2」各2単位を1年次に配当したことにより、1年次における専門導入科目は必修12単位（一般教育の「社会学」含む）と選択最大16単位（情報処理科目含む）という現在の体制になった。

社会学の導入講義4単位と少人数講読ゼミ4単位を軸として、1年次生の導入教育を図るという学部創設期の体制は、およそ20年あまり続いたが、1997年以降は、社会学の導入講義と「基礎研究」以外にも、1年次生が選択できる専門科目が増えており、従来のように社会学専攻向けの「社会学」と「基礎研究」の担当者だけで1年次の教育指導を計画で

きる状況ではなくなっている。1年次の専門導入教育は、「基礎研究」「社会学」「社会学総論」という3つの必修科目を軸としつつも、その他の1年次配当専門選択科目との連携も視野に入れるべき状況になっているといえる。

こうした現状を踏まえた上で、本研究では、1年次配当科目の担当者のうち4名が参加して、それぞれの担当科目間の授業連携の必要性や可能性を検討した。

## 2. 本研究の経過

2006年6月27日	第1回研究会
2006年7月19日	第2回研究会
2006年9月26日	第3回研究会
2006年12月	1年次学生を対象とした意識調査
2007年1月	調査結果の集計および分析

第1回研究会では、社会学教育に関する先行研究を概観し、実際の授業での指導内容に踏み込んだ研究はおこなわれていないこと、各授業間の連携効果についての調査もおこなわれていないことを確認した。さらに、授業間の連携を考える上で、とくに「社会学の基礎概念」と「データの読み方・集め方・提示の仕方」という二つの指導項目において、授業連携の必要性がとくに高く、またその効果も期待できるのではないかという結論にいたった。そして、これらの指導項目において、現状の指導計画のなかでどのような連携が図られているのか確認するために、研究分担者各自の指導計画を詳細に報告しあうことにした。

第2回研究会では、研究分担者全員による授業実践報告会をおこなった。春学期の「基礎研究1」および「社会学（社会学入門）」においては、「社会学の基礎概念」の指導がおこなわれており、同じ基礎概念を複数の授業で繰り返し指導することの意義が評価されるとともに、それらの基礎概念を学生自身がさまざまな社会学の入門書などで調べて発表することが理解を深めることにつながることを確認された。また、「データの読み方・集め方・提示の仕方」についても、春学期の「社会学」および「基礎研究1」において、なんらかのかたちで指導されており、とくに秋学期の「基礎研究2」においてさらに指導の力点がおかれていることがわかった。そうしたなかで、1年次配当の選択科目である「社会調査論1」（春学期）、「社会調査論2」（秋学期）との連携が求められるところだが、より効果的な連携を図るためには具体的なデータ処理について指導する「社会調査論2」の内容を

春学期に履修させた方がよいのではないかという結論に至った。こうして、2007年度からは、「社会調査論1」と「社会調査論2」の配当学期を逆転させて、春学期に「社会調査方法論」（旧「社会調査論2」）を履修させて、データ処理についての基本的事項を指導して、「基礎研究1・2」との連携を高めるようにした。この変更にもなう教育効果の向上については今後検証する必要があるが、1年次科目の担当者が各授業の指導内容を互いに話し合うことによって、指導内容の学期配当を再考できたことは本研究がもたらした重要な具体的成果の一つである。

第3回研究会では、指導者側が意図したような「授業連携」について、学生側はどの程度意識しているのかを知ることの重要性が議論された。学生の側に1年次の専門導入科目群を一つのまとまりとしてとらえ、授業間の関連を意識する態度がまったくなければ、教員が「授業連携」を工夫したところであまり効果は期待できない。そこで、各授業の間の関連性について1年次学生を対象とした意識調査をおこなうことにした。調査対象となる授業については、1年次配当のすべての専門科目とするか、本研究分担者が担当した科目だけにするか意見が分かれたが、こうした調査自体が初めての試みでもあることに配慮して、本研究分担者が担当する授業だけを対象として関連性を調べることにした（表1参照）。

具体的には、上記表内のゴシック体で表記した科目間の連携について学生の意識を調査した。すなわち、春学期に履修した「基礎研究1」が秋学期の「社会学（現代の社会）」の履修に役立っているかどうかをたずねた。上記2科目は、ともに必修であるため、社会

表1 2006年度社会学専攻1年次配当科目（すべて2単位科目）

春 学 期				秋 学 期			
科目名		クラス数	担当者	科目名		クラス数	担当者
基礎研究1	必修	6	杉野・永井 松原・大和	基礎研究2	必修	6	片桐・杉野 松原・古川 大和
社会学 (社会学入門)	必修	2	片桐	社会学 (現代の社会)	必修	2	永井・山本
社会学総論1	必修	1	オムニバス	社会学総論2	必修	1	オムニバス
社会調査論1	選択	1	間淵	社会調査論2	選択	1	間淵
現代社会論1	選択	1	岩見	現代社会論2	選択	1	岩見
産業社会学	選択	1	高瀬	社会システム論	選択	1	高瀬
情報処理基礎演習	選択	16	久本ほか	情報処理演習1	選択	16	久本ほか

学専攻の1年次生が全員履修していることと、いずれも研究分担者が担当した科目であるため、調査対象とした。

### 3. 授業連携に関する学生意識調査の結果と分析

意識調査は2006年の12月はじめに、秋学期「社会学（現代の社会）」の授業のあとにおこなった。調査項目は、入学年次と学籍番号をたずねる質問（春学期の「基礎研究1」はこれらの情報によってクラス分けされるので、当該学生が所属していたクラスがわかる）と、授業間の連携効果をたずねる質問「この授業（秋学期の「社会学（現代の社会）」）を理解するのに、春学期の基礎研究の授業は役立ちましたか」である。またこの「役に立ちましたか」という質問の後に、「そのように思った理由を詳しく書いてください」として、自由記述による説明も求めた。有効回答者数は97名で、その内わけは、春学期の「基礎研究1」が4組だった者が32名、5組だった者が29名、6組だった者が27名（以上はすべて1年生）、そして2年生以上の者が9名である。

まず表2に、春学期の「基礎研究1」のクラスと、「役に立ちましたか」に対する回答との関連を示した。この結果を見ると、合計では約3割が「役立った」、5割が「やや役立った」と答えている。またクラスごとの違いを見ると、春学期の「基礎研究1」で5組

春学期の基礎研のクラスと秋学期の社会学を理解するのに春学期の基礎研は役立ったかのクロス表

		秋学期の社会学を理解するのに 春学期の基礎研は役立ったか			合 計
		役立った	やや役立った	あまり役立た なかった	
春 学 期 の 基 礎 研 の ク ラ ス	社06の4組	8	15	9	32
	春学期の基礎研のクラスの%	25.0%	46.9%	28.1%	100.0%
	社06の5組	10	18	1	29
	春学期の基礎研のクラスの%	34.5%	62.1%	3.4%	100.0%
	社06の6組	6	15	6	27
	春学期の基礎研のクラスの%	22.2%	55.6%	22.2%	100.0%
	社05以前 その他	5	3	1	9
	春学期の基礎研のクラスの%	55.6%	33.3%	11.1%	100.0%
	合 計	29	51	17	97
	春学期の基礎研のクラスの%	29.9%	52.6%	17.5%	100.0%

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率（両側）
Pearsonのカイ2乗	10.230 a	6	.115
尤度比	11.277	6	.080
線型と線型による連関	1.263	1	.261
有効なケースの数	97		

a. 4セル（33.3%）は期待度数が5未満です。最小期待度数は1.58です。

に所属していた1回生、そして2回生以上で、「役立った」「やや役立った」と答えたものが多いように思えるが、ケース数が少ないので統計的には有意ではない。

しかし自由記述を検討すると、学生がどのような面で「役立った」と感じているかにおいて、クラスごとの差が見られた。つまり連携効果の量的な面というより、質的な面において、違いが見られたのである。

では、つづいてクラスごとにデータを詳しくみていこう。

まず春学期開講の「基礎研究1」4組のようすから説明する。このクラスの授業は、資料1の「2. 授業計画の実例」に掲げられた「(1) グループ作業とスタディ・スキルを中心とした授業計画（担当者：永井）」で運営された。後述の5組・6組の授業では社会学の基礎概念の理解に重点がおかれるのに対し、4組ではスタディ・スキルの修得に多くの時間を費やした。

関西大学では、全学共通のスタディ・スキル指導が十分でなかった。これを補うため、社会学専攻では独自に1年次の基礎研究の場を援用し、専門への導入と同時並行で共同作業のしかたや報告のノウハウを身につけさせようとしてきた。この経緯の延長にあるのが、「グループ作業とスタディ・スキルを中心とした授業計画」といえる。

近年では、スタディ・スキルの修得をめざす授業を「全学共通科目」として位置づけようとする動きがあり、ディスカッションに特化した授業を設ける学部もある。社会学部の基礎研究におけるスタディ・スキルの教育は、そういった動きに先行していた。だが、社会学部でも「情報処理基礎演習」、「情報処理演習Ⅰ／Ⅱ」のようなIT関連のスキルを修得させる科目が別に設置され、図書館が資料検索のためのガイダンスを開催するなどの対応が整備されるようになり、学部の専門科目に組み込んで教えるべき内容は減少していった（他の専攻では「基礎研究」の授業で図書館での情報検索を教えることがある）。

残されているのは、上位年次のゼミで個人報告をするための準備として、レジユメを作成したり、ディスカッションをしたりする技法の基礎を身につけることである。新入生たちは、高校までの教育のなかで、他者とちがった自分の意見を述べることに對して遠慮がちにふるまう習慣が植えつけられている。5～6名の班で話し合い、その意見をクラスのなかで報告するという段階を踏んでいるのは、より議論に開かれたコミュニケーションへと導くための工夫である。議論することに躊躇を感じない構えをつくることは、とりわけ社会学教育のなかでは重要である。ディスカッションへの促しは、他の授業に移管することなく、ひきつづき「基礎研究」の授業内容の主な構成要素となっている。

問題は、こういったスキルを身につけるための実践が、必ずしも社会学の基礎概念を理解する機会に結びつかない点である。受講生たちに、自分たちで興味をもったテーマについて自主的に調べるよう指導すると、社会学に適合的な素材を選ぶときもあるが、方向づけがむずかしいことがしばしば生じる。

たとえば、少年犯罪について調べるという班が報告をしたあとは、公的な犯罪データの読解のしかたやラベリング理論について教員が補足説明する展開が可能である。しかし、近世大坂の商取引について調べた班については、歴史的な事象を現代社会の理解につなげる方向づけをすることで終わってしまい、社会学固有の概念装置について説明する時間が不足する。

意識調査の結果をみると、スタディ・スキル修得が中心のクラスでは、こういった点が受講生の感想にもあらわれている。上記の表で、春学期の基礎研究の授業が、秋学期の社

春学期の基礎研のクラスが4組か否かと秋学期の社会学を理解するのに  
春学期の基礎研は役立ったか否かのクロス表

			秋学期の社会学を理解するのに 春学期の基礎研は役立ったか		合計
			役立った+やや役立った	あまり役立たなかった	
4 組 か 否 か	4組	度数	23	9	32
		4組か否かの%	71.9%	28.1%	100.0%
	その他	度数	57	8	65
		4組か否かの%	87.7%	12.3%	100.0%
合 計	度数	80	17	97	
	4組か否かの%	82.5%	17.5%	100.0%	



カイ 2 乗検定

	値	自由度	漸近有意確率 (両側)	正確有意確率 (両側)	正確有意確率 (片側)
Pearson のカイ 2 乗	3.712 <sup>b</sup>	1	.054		
連続修正 <sup>a</sup>	2.698	1	.100		
尤度比	3.525	1	.060		
Fisher の直接法				.086	.053
線型と線型による連関	3.673	1	.055		
有効なケースの数	97				

a. 2 x 2 表に対してのみ計算

b. 0 セル (.0 %) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は 5.61 です。

社会学の講義を理解するのに「役だった」かどうか、ではクラスごとに大きな差を認めることはできない。しかしながら、スタディ・スキル修得が中心の 4 組かそれ以外の組かというダミー変数と、役立ったか否かという変数（「役立った」と「やや役立った」を 1 つにまとめ、「あまり役立たなかった」と対比）を作成してクロス集計すると、表 2 のとおりになった。

カイ 2 乗検定、正確検定いずれも危険率 5 % だと有意ではないものの、危険率 10 % では有意となり、「あまり役立たなかった」と回答した者が、他のクラスよりやや多くなっている。これは、発表のしかた、あるいは議論のしかたなどの「技術」の修得が、必ずしも講義で呈示される概念の理解に結びつかないことに対する、受講生の正直な感想であろう。

- ・春学期の基礎研究は、社会学の論理を学ぶというより、研究やレポートの使い方、などを重点的にやっていたと思うから、この授業とはまたちょっと違うと思うから。
- ・グループ制作による自由課題だったから関係なかったから。
- ・春の基礎研では、社会学の基本的概念を学ばなかったから。

（以上は「あまり役立たなかった」と回答した者の自由記述）

- ・春学期の授業は、グループ発表で、秋学期の授業のように社会学というのをあまり感じなかった。また、この授業とどのように関係しているのかを見つけられなかった。
- ・春学期の基礎研究は楽しかったのですが、主にレジュメの作成方法を学んだ気がす

るので、社会学の授業を理解するのに役立ったかといわれれば、少し役に立ったとしかいえません。社会学では多くの用語がでてきて、初めてきいたものも多かったので、基礎研究でも少しとりあげてもらえたらうれしかったなと思いました。

(以上は「やや役立った」と回答した者の自由記述)

ちなみに、調査が実施された2006年度春学期の4組の各班が設定した研究テーマは別表のとおりである〔学生の表現のママ〕。

1班 ターゲットは高齢者!?

[注: コンビニエンスストア業界の高齢者向けサービスについての研究]

2班 内定率とダブルスクールの間には資格の増加が関係ある

3班 若者の活字離れは本当か!?

4班 関大生の海外ブランドに対する意識

5班 関大生の喫煙と恋愛に対する意識について

6班 結婚に経済力は必要か!?

一見してわかるように、高校を卒業したばかりの初学者には、社会的に検証可能な命題を立てることがむずかしい。テーマとして掲げられた文が何をいいたいのかわからないものもある。感嘆符や疑問符をつけることで、それが解くべき謎であるかのようにしているものの、問題を簡潔な一文として表現する段階には、残念ながらいっていない。

レジュメには必要なデータや参考文献があげられるから、報告を聞けばディスカッションの焦点を見いだすこともできるし、そこから関連する社会学の基礎概念について説明することもできる(上記の例では、「因果関係と相関関係とのちがひ」や「性別ごとの役割期待のちがひ」など)。だが、限られた授業時間のなかで多くの受講生に「発言」させ、議論する習慣を身につけさせるだけで手一杯になることも少なくない。

このような問題点は、以前はあまり顕著ではなかった。それは、受講生の側で自由に選んだ研究テーマであっても、報告時までには、あるていど社会的に考察しうる命題をつくらせてくることを期待できたからである。しかし、この数年、そういった期待はできなくなりつつあるのが現実だ。そこで、調査結果を受け、2007年度からはテーマ設定についての小グループでの話し合いに教員が積極的に介入するかたちをとった(社会で一般的に受け入れられている「通念」をとりあげ、それとはちがう解釈をデータとともに示すよう、強く指示した)。その結果、前年度に比べれば、議論の焦点をつくりやすいテーマ設定がな

されるようになった。同じく4組の例をあげておく〔これも学生の表現のママ〕。

- |    |                                  |
|----|----------------------------------|
| 1班 | What's 美人!? ~美人は本当に得なの?~         |
| 2班 | 転職する人が増えていると言われているのは本当か?         |
| 3班 | おい! どうなってるんだ 今の離婚事情              |
| 4班 | 消えた短パン少年~「わんぱく」より「かっこよさ」~        |
| 5班 | 社会学部は本当に就職が不利なのか!? [注: 経済学部との比較] |
| 6班 | 男は浮気する生き物と言われるのが本当か?             |

教員の介入によって、授業の運営は円滑になり、他の授業との連携もとりやすくなるだろう。テーマ設定の段階から、秋学期の講義で扱われる基礎概念を含みこませておく操作もできる。ただし、その分、学生たちの主体性や、試行錯誤からの学習あるいは発見の機会を削ぐプログラム（仕掛け）でもある。これが「改善」だと評価できるか、否か。他日の検証を待ちたい。

スタディ・スキルとして教授している内容のひとつに、「ノートづくりかた」がある。入学後の早い段階に、高校で馴染んだ板書を実直に書き写すスタイルから、大学での勉学にふさわしいノートの取り方に切り替えさせるための試みだが、これについての感想が自由記述のなかに散見された。たとえば、「ノートの取り方がとても役立ったし、春に〔基礎研究の授業で〕自分たちで研究したこと、学んだ考え方などをこの〔秋学期の〕社会学〔の講義〕で確認できた気がする」といったものである（「役立った」と回答した者の自由記述）。

スタディ・スキルのうち、レジユメの作りかたやディスカッションのしかたなどの技術は、講義スタイルの授業形式では直接的に活かされない。これに対し、ノートを取るという行為は、毎回の講義で必ずしなければならない作業である。社会学に限らず他の履修科目もふくめ、大学に入学したばかりの1年次生にとっては、大学教員の話す言葉を理解して要約し、記録することは、たいへんに苦しい体験だといえる。

したがって、「ノートづくりかた」という項目について、秋学期の講義に際して「役だった」という評価が得られるのは当然だ。春学期の基礎研究で、社会学の概念を用いた模擬講義を行ない、それを書き取らせるかたちで「ノートをつくる」というスキルを身につけさせるかたちにすれば、形式が異なる授業の連携が直接的なものになるだろう。

4組の受講生から得た回答について、最後にもう一点指摘しておきたい。それは、授業の連携を、単純に、直線的に積みあげられるものとみなしてはならないということである。

社会学の基礎概念を理解し、その理解に立って調査をしたりデータを読み取ったりする、そこから社会的な知見を得る……こういったきれいな流れには、必ずしもならないということが、自由回答のなかにあらわれている。

- ・春学期はあまり社会学というものをしっかりと理解出来ていたわけではなかったのですが……やっとなんげに理解出来てき〔て〕……今一度にたくさんの社会的な事象を理解することが出来る種になったと思います。

(以上は「やや役立った」と回答した者の自由記述)

- ・基礎研究では、アンケートのとり方など実践的なことを学んだように思うが、社会学では基本的な知識を学んだと思う。基礎研が社会学の授業を理解するのに役立ったというよりは、社会学の授業が基礎研に役立ったのではないかと思う。

(以上は「あまり役立たなかった」と回答した者の自由記述)

われわれが想定していたのは、「春学期の基礎研究1」から「秋学期の社会学」へという流れである。このなかで、時間的に先行する授業で得たものが、後続する授業の理解においてどういう効果を示すのかを見極めたいと考えた。調査票の質問文「この授業を理解するのに、春学期の基礎研究の授業は役立ちましたか」は、評価対象となる「理解」について、効果の蓄積を前提にしている。しかし、回答は、そういう流れにうまく位置づけられない別の「効果」があることを示唆している。秋の講義を受けたことがきっかけで、春学期の基礎研究のときに手探りで調べたことの意味を問い返す、遡及的な再解釈が行なわれているようなのだ。

授業の連携というばあい、隣接する分野や、あるいはまったく別の分野の影響が皆無であるとは考えにくい（それは評価しにくいものだが）。同様に、時間についても、広い視点を保ちつつ授業の相互評価をしていくことが、大学の教育内容を反省するばあいの重要な事項であると感じる。

次に5組についてみよう。5組の授業は、資料1の「2. 授業計画の実例」における「(2) グループ作業と個人発表による、基礎概念・比較による研究法・コミュニケーションスキルの習得を中心とした授業計画（担当者:大和）」に示した。この授業では、秋学期の「社会学（現代の社会）」で使うものと同じ教科書を用いている。その教科書を中心に社会学

の基礎概念を学ぶことが、1学期の授業のうちの前半3分の2の目標である。その方法は、講義形式ではなく、学生が調べ、レポートを書き、グループでディスカッションを行い、その結果をグループで発表するという演習形式によっている。さらにクラスの約半分の学生は、個人発表においても、学んだ基礎概念を用いて社会現象を解釈するという応用的課題を与えられる。

学生の自由記述による回答を見ても、春学期の「基礎研究1」において基礎概念を演習形式によって学んだことが、秋学期の「社会学（現代の社会）」に役立ったという回答が多く見られた。

- ・春学期の基礎研究では、アノミーやラベリング論などについての個人発表などもあったので、後期に入ってから講義中に名前が出てきても迷わなくなったから。
- ・前期の基礎研究の授業で、社会学の基礎用語（？）みたいなのを調べたり、それについて話し合う機会があったから。
- ・ラベリング論やレットテルについて自分たちでレポートを出していたので、理解するのに役立った。
- ・アノミーとか、ラベリング論などについては、本を読んでまとめたり、先生が解説して下さったりしたので、ある程度はわかっていたから。

（以上は「やや役立った」と回答した者の自由記述）。

- ・春学期の基礎研究の授業で、秋学期に社会学で習った章の要約などをやっていたので、社会学の授業が春よりも早く理解できた。
- ・普段聞き慣れない語句も多く、実際予備知識が無ければ何のことなのか把握しづかったことだと思う。基礎研究ではその内容をグループや個人で触れ、今回の社会学で自分の頭の中に定着させることができた。
- ・今日やった予言の自己成就に関しては特に内容が重なっていたので、理解が深まったと思う。それ以外にも、やはり同じ“社会学”なので考え方など通じるものがあるって、春学期で社会学の考え方の基礎を学べて良かったなと思った。
- ・基礎研究で、教科書を読んでレポートをまとめるという課題があったので、社会学の授業の内容があらかじめある程度理解できていたから。社会学の授業は基礎研究の内容の復習という感じだったので、わかりやすかった。

（以上は「役立った」と回答した者の自由記述）。

以上のように、自分たちで調べてレポートを書く、グループで話し合う、(グループあるいは個人で)発表するといった演習形式での授業は、新しい概念・新しい専門用語を初学者に理解させるのに有効である。また、新しく学んだことを深く定着させるのに「繰り返し」による学習が効果的であることも、これらの自由記述は示唆している。

自由記述からわかったもう1つのことは、演習形式→講義形式という繰り返し(あるいは授業連携)は、それぞれの欠点を補い長所を生かしあうという相補・相乗効果があることである。演習形式は、学生自身が教科書やその他の参考図書を読む、あるいは他の学生の発表を聞くことによって進められる。この形式は、学生の主体的関心を喚起するという面においては、講義形式より優れていると思われる。しかしながら、演習形式によって専門概念を理解するためには、専門書を自分で読み理解する力や、クラスメートである学生の発表(それは教員の説明に比べると言葉足らずであることがままある)から専門概念を理解する力が必要である。このような力が乏しい者にとっては、演習形式だけで専門概念を完全に理解することは難しいようである。このような場合に、演習によって主体的関心を喚起したあと、講義で教員がていねいに説明することによって、学習効果はさらに高まるように思われる。次の自由記述がそのことを示している。

- ・ 予言の自己成就や、ラベリング論は春学期の基礎研の発表で自分が担当するところだったので、基礎研は教科書や本で調べて自分なりの解釈ですすめていたので、授業でもう一度学ぶことでちゃんとした知識を得られたから。
- ・ 基礎研究の授業では、教科書に沿ってすすめられていたので、正直に言うと言葉が難しくよくわからない所もあった。でもそのわからなかったところも社会学の授業を受けることで理解することができた。

ここまで述べたように5組の授業の前半3分の2は基礎概念の習得であるが、後半3分の1は「比較研究」という研究方法の習得である。この部分については、基礎概念の習得に比べると、この調査の対象となった秋学期の「社会学(現代の社会)」との直接的な関連は薄い。したがって自由記述で、比較研究という方法の習得という面を取り上げて、「(やや)役立った」と答えた者は、次の1人を除き、ほとんどなかった。比較という研究方法の習得は、講義より、他の演習科目の授業で発表などをするとき、より役立つものと思われる。

- ・研究方法がわかった。比較を使うことによってものの考え方、見方が変わった。

まとめると、春学期「基礎研究1」における5組の授業と秋学期の「社会学（現代の社会）」は、基礎概念の学習を、演習形式と講義形式という相補・相乗効果のある方法で、繰り返し教育するという面において、連携効果が見られた。また、異なる授業を自分なりに関連させながら学習をすすめるという「構え」が、やや乏しい学生が見られる中で、2つの授業が同じ教材を使っていることは、両授業が関連していることを学生に強く印象づけるのに効果的であると思われた。

最後に、春学期「基礎研究1」の6組に所属していた学生の自由記述回答結果について考察する。6組の「基礎研究1」の指導内容は、資料1の「2. 授業計画の実例」における「(3)個人発表と基礎概念の習得および比較研究の実習を中心とした授業計画（担当者：杉野）」に示したとおりである。指導の重点を「基礎概念の習得」にしているので、アンケートの自由回答にもそうした表記が見られた。

- ・社会学について何もわからない状態で授業をうけながら基礎研究を行うことで実際に自分の頭で考えることができて、互いの授業で学んだことをそれぞれ生かせる気がする。（「役立った」と回答した者の自由記述）

しかし、春学期の「基礎研究1」が秋学期の「基礎研究2」の理解に役立ったかという問いについては限定的な効果にとどまっているとする回答が目立った。

- ・基礎の基礎から社会学の色々な言葉を教えてもらったので、基礎研と内容がかぶっている部分はわかりやすかったけど「構築主義」とか、新しく出てきた言葉は難しく感じました。（「役立った」と回答した者の自由記述）

- ・けっこう詳しく説明してくれたので役立ったと思う。けど社会学の授業と内容が被ったのは時間がかかったので、少しわすれていてなんかそんなんあったなというくらいだったような気がする。
- ・春学期の基礎研究では、いろんな社会学者について学んだ。その中で彼らの研究から自分のためになるものもあった。

（以上は「やや役立った」と回答した者の自由記述）

これらの回答は、春学期に習得した内容が、時間の経過によって秋学期まで定着持続しないためである解釈することも可能だが、春学期での習得内容が秋学期の授業理解に役立ったという5組の学生の回答に照らせば、6組の回答傾向には別の要因があると考えられる。6組の回答のなかには、春学期の「基礎研究1」の内容と、秋学期の「社会学」の授業内容との関連を明確に否定する意見も少なくない。

- ・個別には理解できたが、春学期の基礎研究の授業と直接的な関連性を見出だせなかったもので、役立ったかという点と少し疑問だが、名前の通り社会学の基礎、基本的な考え方を学ぶのには役立ったかなと思う。

(「やや役立った」と回答した者の自由記述)

- ・後期の社会学の内容は前期の基礎研ではやってません。今、基礎研のグループ演習で「少年犯罪」について調べていて、「犯罪社会学入門」という本を読み終えたところだったので後期社会学後半はおもしろかったです。社会構築主義の理解が深まってよかったです。
- ・調べ方について習っていたので、基本的なことではつながっているのかもしれないけど、授業での考え方とかとはあまり結びつかなかった。デュルケムについては習ったので自殺についてのところはわかりやすかったけれど。

(以上は「あまり役立たなかった」と回答した者の自由記述)

これらの意見は、春学期の「基礎研究1」と秋学期の「社会学」の指導内容に相当のずれがあることを示唆している。両者の授業を比較して、明確に後者を選好する意見もあった。

- ・前期は入門編みたいなもので、一般的な話や、歴史、専門用語が多かったが、後期はより具体的に自分達の身近なものを取り上げているのでわかりやすい。

(「やや役立った」と回答した者の自由記述)

- ・社会学的な考え方・調査の仕方などの基本中の基本を学び、知ることができたので。この授業のおかげで「社会学」が何をすることなのか分かったような気がします。

(「役立った」と回答した者の自由記述)



また、上記の2番目の回答のように、質問の趣旨を取り違えている回答もあり、この他、「前期の社会学が後期の社会学に役立った」「社会学が（社会学）総論の理解に役立った」などの回答があった。したがって、6組学生のサンプルについては、「春学期の基礎研究が秋学期の社会学を理解するのに役立ったか」という点でのクロス集計結果の信頼性にはかなり問題があると言えよう。

ところで、「基礎研究が社会学に役立ったか」という質問意図に対して、「社会学」や「社会学総論」などの講義課目が「基礎研究」に役立っているという逆の連関を指摘する声もあった。

- ・どっちかっていうと、基礎研を理解するのにこの授業が役立ちました。順番的に。順機能とか逆機能とかいろんな言葉の説明を聞いた後、それを使ってレポートを書いたりしたから。  
(「役立った」と回答した者の自由記述)
- ・前期の授業のさいしょでは、「あっこれやったな」と思うことが何度かあったが、後のほうはそれが減ったため。もっとも、自分でレポートを作るのが主になったからと言えるが。しかし、レポート作成時でも役立ったことがあったし、基礎研以外の授業にも役立った。「基礎研が役立った」というより、「基礎研に役立った」気がする。  
(「やや役立った」と回答した者の自由記述)
- ・春学期の基礎研は、自分で調べたことをレジュメにして発表したことが一番印象に残っているので、それが社会学の授業に反映しているとは思いません。どちらかという、社会学や総論が基礎研に役立っています。  
(「あまり役立たなかった」と回答した者の自由記述)

以上のように、6組の自由記述回答を詳細に検討してみると、春学期の基礎研究が秋学期の社会学の理解に①役立った、②やや役立った、③あまり役立たなかったという3分類とは別に、2つの授業に関して①ある程度関連していたという意見と、②ほとんど関連していないという2つの意見があり、さらに、「秋学期の社会学が役立った」という意見と、「専門講義が基礎研究に役立った」という意見がある様子が見えてきた。

また、4組から6組までサンプル全体を通じて共通する点は、「繰り返し」による学習効果を学生自身も感じていることである。

・やはり連動した授業の方がわかりやすいし、理解が深まると思う。社会学の基礎研究と社会学に限らずだと思えますが。

(「やや役立った」と回答した上位年次生の自由記述)

したがって、「先生によってだいぶ内容が違うと思った。」(「役立たなかった」と回答した上位年次生) や、「基そ研の先生を春と秋でかえるのでややこしい。～は習ってるかとかくいちがっていて不便。」(「役立たなかった」と回答した6組学生) といった意見には耳を傾ける必要もあるかもしれない。

#### 4. 「基礎研究」と「社会調査論1／2」との連携

春学期に配置されている「基礎研究1」のうち「グループ作業とスタディ・スキルを中心とした授業計画」によって展開される授業では、受講生が5～6名のメンバーからなる班に分かれて、話し合いのなかから研究テーマを決めて共同で報告するのが主要な内容となっていた。テーマによっては、統計や文献などを図書館で調べ、あるいはインターネットで関連資料を検索し、それらを編集することでレジュメを作成すれば事足りるものもある。しかし、いっぽうで、自分たちが独自に調査を実施して、既存の調査報告などと比較するという作業にまで踏み込む意欲的な学生も少なくない。

もっとも多いのは、学内で実施する簡単な聴き取り調査であり、学部や年次、性別などによって生活実態や、態度・意識がどのようにちがっているのかを比べるというものである。また、家族や友人などをつうじて学外の対象者にも調査票を配付・回収するといったケースもあった。

いずれのばあいでも、受講生が調査票を作成するときにイメージしているのは、巷間おこなわれている簡単な市場調査などの質問紙である。あるいは、テレビのバラエティ番組などで見受けられる単純な質問のセット程度のものである。教員の指導によって、『アンケート調査年鑑』などに掲載されている既存の調査を見て、一定の水準にある「調査票」に近づけようと努力はするものの、ノウハウとしてはまだじゅうぶんに身につけていないので、できあがった質問紙も、また集計された結果も、けっしてよいものにはならない。また、サンプリングなどの知識もほとんどないため、出会った人に声をかけて、協力してもらった人から回答を得てすませしてしまうのが、せいっぱいである。

こういった不備の多い調査を、調査と呼ぶのかといえば、答えは否定的である。しかし、初学者に、試行錯誤のなかから学ばせるという教育的な効果は認められよう。悪い質

問文だと、結果がどうなってしまうのかを身をもって理解させる。よりよい調査のためには、どういった質問のかたちにすべきか、どういうふうに対象を設定するかを考えさせる。単純集計だけでなく、クロス集計にすることで、さまざまな解釈の可能性が生まれる。これらを理解させる意味では、あえて不備の多い調査をさせる意義も皆無とはいえない。だが、じっさいには、多くの労力を用いたのに何も得るものがないとか、協力してくれた調査対象者の時間を奪ってしまうといった弊害のほうが目立つようになった。

解決策として、ひとつは、たとえ簡単なアンケート調査をするばあいでも、対象を学内にとどめるよう指示することにしてきた。これは、不備の多い調査を学外で実施することによって調査フィールドが荒廃し、きちんとした調査をおこなおうとする肝心なときに調査協力が得にくくなる事態を避けるためである。もうひとつは、既存の調査データの2次利用を勧めることである。さらに、上述のように、基礎研究と並行履修する社会調査についての授業の運営のしかたを改めたことである。

とくに、基礎的データの取り扱いについて解説する「社会調査方法論」（旧「社会調査論2」）は、本研究が実施される前の年度まで秋学期に配置されていたが、これを春学期に配置したことにより、1年次の早い時期に、一定のレベルの質問紙調査を実施できるだけの基礎的知識を学ぶことになった。「社会調査方法論」（旧「社会調査論2」）では、仮説構築の方法、標本抽出法、調査票の作り方（ワーディングに関する注意事項を含む）と配付・回収方法、単純集計・クロス集計の取り方と読み方などを教えている。この授業科目配置の変更により、早ければ1年次の春学期後半に、遅くとも秋学期の「基礎研究2」の段階では、それらを応用することが可能になった。こういった改善に着手できたのは、上述のとおり、1年次配当科目の授業担当者のあいだで意見交換をした成果であるが、いっぽうでそれは、基礎研究や社会調査論の受講生と担当教員とのあいだのコミュニケーションが円滑になされているからこそでもある。

春の基礎研究では、担当者が、「〇〇については、社会調査論の授業で習った？」あるいは「〇〇の概念は、社会学の講義で、もう教えてもらった？」というように受講生に尋ねながら授業を進めていくということが積み重ねられてきた。同様に、「社会調査方法論」（旧「社会調査論2」）でも、基礎研究での学習内容に対して頻繁に言及しつつ授業を進めるように努めてきた。「社会調査方法論」の上述した授業内容は、基礎研究において学生が調査をいかに企画・実施していくかを方法論的に導くものに他ならないからである。また、「社会調査論2」が秋学期に開講されていた時期には、授業担当者が受講生に感想を求めると、「この授業で教えてもらったことをもっと早く教えてもらえば、基礎研究でや

った調査をもっとうまくやれたと思う」とか「基礎研究で自分達がした調査のどこがどう駄目だったのか、この授業を受けてよくわかった。次に調査をするときは、もっとちゃんとした調査をしてみたい」といった感想がしばしば寄せられた。以上のように、受講生と担当教員のあいだのコミュニケーションが具体的な授業改善につながったとみなしうる。

## 5. おわりに

ものごとの全体像がつかめている人は、そのなかに含まれる部分がどういう意味をもち、部分部分がどういった関係になっているかということを知っている。大学の教員は、カリキュラムの全体を把握しており、個々の授業がどのように連関しているかを理解している。受講生が年を経るにしたがって、どういうふう to 成長するかについても予測が立つ。

しかし、入学したての学生にとっては、専門科目の内容は初めて学ぶものである。また、さまざまに展開されている授業の、どれとどれがどういうふうにつながっているのかを見極める力はまだ持ち合わせていない。

2006年度の秋に、やはり1年次に担当されているリレー講義「社会学総論」の担当回があった。これは水曜に配置されていて、2週連続で担当をした。木曜には「社会学」の講義がある。受講生からみれば、同じ教員が水曜3限、木曜1限、次の週の水曜3限、木曜1限と連続して4度登壇することになる。

そこで、1週目の「社会学」の授業に際して「内面化」という概念について例をあげて説明しておき、翌週の「総論」でも、別の例をあげて「内面化」について触れた。「総論」の授業では、時間内にレポートを書かせ、「内面化」の具体例をあげて論述するよう指示をした。前の週の講義内容を思い出すことができれば、簡単に書けるはずである。だが、約半数くらいの学生たちは適切な例を思い浮かべることができず、課題に苦しんでいたようだ。

そして、その翌日の朝の「社会学」の授業で、感想を書かせてみた。教員からの問いは、「(きのうの) 総論の授業で「内面化」についての課題を書くとき、(1週間前の) この社会学の講義について思い出し、関連づけることができましたか?」である。

その感想を、一部紹介しておこう。

〔関連づけることができなかったという回答から〕

- ・大きな社会学というわくでとらえず、総論は総論、社会学は社会学という区別が無意識のうちに自分の中にあっただからだと思う。
- ・社会学の授業を応用するという考えが出てこなかったなので、書けませんでした。
- ・授業を受けたときは理解したつもりでも復習していないので結局理解していないのと同じで、1週間後には忘れていたからだと思います。
- ・終わった授業内容は、すぐに忘れてしまいます。
- ・復習が足りなかったと思う。
- ・できなかった。自分の中で授業を分けているのかもしれない。前期の習いたての時は、社会学の授業で基礎研究の課題のヒントを得たと思ったのに……。
- ・たぶん、その授業の内容を理解するのにいっぱいいっぱい、そこまで考える余裕がなかったからだと思います。
- ・他の授業で先生が話した内容を、そのまま書いてはいけなような気がするからです。
- ・別の授業なので、ネタをパクってはダメかなと思った。

〔少しは関連づけられたという回答から〕

- ・もっと授業中、メモなどをとってあれば頭にのこったのかなと思った。聞いていただけだったため。

〔関連づけることができたという回答から〕

- ・同じ話題が同時期の授業でとりあげられているだけあって、理解しやすかった。……内面化の問題は身近であるが難しいので、2つの授業で例が聞けてよかった。

関連づけることができなかった理由として示されているのは、授業ごとに、それぞれを別のものと意識する構えである。1週間前のことは忘れたという、いくらか情けない回答もあるが、問題は、関連する内容を思い出しているにもかかわらず、別の授業で聞いたことを書いてはいけなような気がした、という感想にあらわれている。このように、関連を認識しつつ、それを表現することを抑制していた例が含まれていようとは思ってもかけず、感想を書かせてみてはじめてわかった。

授業の連携というのは、授業の内容を相互に関連づけていく教員側の技術や調整だけで

改善されていくわけではなさそうだ。受講している学生に、まず「授業は連携している」「関連づけて考えるべきだ」（あるいは「関連づけて考えるのを禁じていない」といったほうがよいのかもしれないが）といったメッセージが届いていなければ、教員側の工夫も無駄になるだろう。

また、受動的な受講ではなく、積極的な作業に関連づけることができれば、それがたとえば「メモをとる」といった小さなことでも、授業の内容を記憶の隅にとどめさせることができ、別の授業の刺激によって活性化されることを期待もできるようだ。

最後の回答にあるように、授業の連携とは、同じことを繰り返して印象づけるという面だけでなく、同じことをちがう角度から説明することで理解を深めさせるという面もある。

こういった学生たちの声が、教員の次の工夫のためのヒントとして活用されることを期待する。

本研究は、平成18年度関西大学学部共同研究費において、研究課題「社会学の導入教育における授業連携」として研究費を受けたものの成果として公表するものである。

資料1. 2006年度「基礎研究1」（春学期2単位）の指導概要

1. シラバス

<p>■講義概要</p>	<p>この授業は、入学直後の1年次生が高校時代の受験「知」と訣別し、大学における本格的な「知」の営みの現場に入るための入門コースである。社会学専攻で4年間を過ごすための学習のガイダンスであり、社会学の基礎概念・理論について理解するとともに、文献・資料の収集方法、レポートやレジジュメの作成方法、口頭発表・討論のしかたなどを学んでゆく。</p>
<p>■講義計画</p>	<p>各クラスの具体的なプログラムについては、クラス別ガイダンスまたは最初の授業の際に担当者から説明がある。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 大学での学習について</li> <li>2. ノートをとる／ノートをつくる</li> <li>3. 研究のための文献を検索する</li> <li>4. 研究のための情報を収集する</li> <li>5. 研究をすすめていくうえでのルールとマナーを理解する</li> <li>6. 社会学の基礎概念を理解する</li> <li>7. 社会学の基礎概念を用いて社会現象を分析する</li> <li>8. 比較によって社会現象をとらえる</li> <li>9. 個人あるいはグループでプレゼンテーションをする</li> <li>10. グループでディスカッションをする</li> </ol> <p>上記の講義計画に掲げられた項目のなかから、担当する教員がいくつかを選択して授業を展開する。少人数による基礎ゼミなので、授業の内容・形態も多様なかたちで展開される。基本概念の解説や社会現象の考察を行う「講義」に近い形態、テキストの講読をふまえての「議論」、グループごとに「作業」を行い、受講生が選んだテーマについて簡単な調査を実施して「口頭発表」を経験する機会などがふくまれる。課題が与えられて提出が求められることや、授業時間外に作業をする必要が生じることもある。</p>
<p>■成績評価の方法</p>	<p>出席状況、発表やレポートの内容、討論への参加の積極性などにかかわる評価のほか、必要に応じてペーパーテストの成績を加味し、総合的に評点を与える。原則として全時間の出席を必要とする。</p>
<p>■教科書</p>	<p>必要な場合は、担当者が指示する。</p>
<p>■参考書</p>	<p>必要な場合は、担当者が指示する。</p>
<p>■備考</p>	<p>基礎研究1（春学期）と基礎研究2（秋学期）は、2科目をあわせて、年間を通じて継続的に授業を行う。1年次における最も重要な授業であり、大学での学習のあらゆる基本を学ぶ機会なので、主体的に参加する姿勢を保ってほしい。受講生がみずからすすんで発言し議論すること、他の受講生と協力して作業にあたることが求められる。「基礎研究」は、2年次配当の「基礎演習」、3年次配当の「専門演習」、4年次配当の「卒業研究」へとつながる、専門教育科目のなかでも基幹となる授業である。</p>

2. 授業計画の実例

(1) グループ作業とスタディ・スキルを中心とした授業計画（担当者：永井）

0回目 4月3日 0. 基礎研究Iのすすめかた

入学時指導として実施されている専攻別ガイダンスにひきつづき、クラス別ガイダンスが行なわれている。新たに大学生活をスタートする学生にとって、高校での担任のような

存在がないことへの戸惑いを軽減するため、基礎研究のクラス担当者が、その代わりのような存在であることを伝達する。ただし、近年は、「顔合わせていど」の位置づけではなく、さらにこの時間を積極的に基礎研究のスタートと考えている。

ひとつには、初回の授業の時間を確保するためであるが、もう一点、体育会系のクラブ活動をする学生の「公欠」を認めないことを厳重に伝えるために、資料#0を配付して授業のルール（出欠の評価）を説明する。また、公式の初回の授業時に受講者全員に自己紹介をさせるのが恒例だが、何のインストラクションも与えないとコンパの自己紹介のようになってしまう。そこで、2006年度は、その当時注目されていたテレビドラマを話題にして、「この社会のなかで、アンフェアなのは誰だと思うか」、「その問題とどう向き合っているか」というふたつの点を示し、初回の授業の自己紹介のなかでふれるべき事項として設定した。また、用紙を配付し、必ず書いて用意するようにも指導した。

#### 1回目      4月6日      1. スケジュール説明・班分け・自己紹介ほか

初回授業時には、教室に早く入り、厳格に出席を取る。資料#1を配付し、大学での学びでは発言にせよレポートにせよ「言葉」にすることが重要であることを強調する。また、基礎研で教えるスキルは基本的なものであって、自分の方法を工夫して身につけていくよう指導する。

その後、スケジュールを説明し、班分けを行なう。班は、学籍番号が近い人間と同じにならないように、かつ性別の偏りがでないように事前に調整したものを発表する。1つの班が6～7名（うち男子が1～2名）になるよう配分する。さらに、メンバーどうしで名前を覚えるまで指差し名前当てゲームを繰り返す。個人情報管理についての注意をしたうえで、メールアドレスを交換させる。さらに、時間割を見せ合いながら、基礎研の作業のための集合時間と教室を決めさせる。プロフィールカードを記入させ、提出させる。これは、おもに教員が生活指導上の参考にするためのものである。

クラス別ガイダンスの時に与えた課題を発表するかたちでの自己紹介を実施。手元には書かせたものがあるので、あがってしまっても何も言えないということはなく、しっかりした意見が出る。また、かなり多様な答えにばらつくが、それがかえって大学（あるいは社会学部）という場の多様性を認識させる効果がある。課題の用紙は提出させる。

最後に、時間があれば、図書館やITセンターの無料講習会について、場所と時間などの情報を伝達する。また、講義の空き時間を有効利用するように指導する。



## 2回目 4月13日 2. ノートをつくる

前回提出された課題に感想を書き込んだものを返却しながら出席を取る。これで、大学でも少人数クラスでは教員からのレスポンスがあるということを理解させる。

資料#2を配付。ノートのとり方について、その意義を説明したのち、実際のノウハウを教え、じっさいに模擬講義をして提出用の用紙にノートをとらせる。さらに、他のメンバーと比較させたりして、ノートを「つくる」部分も体験させる。木曜午前でセットになっている社会学の講義のノートを開けさせ、改善すべき点がないか考えさせる。

ミニ講義をノートした用紙を提出させるが、裏面に、大学生活での悩みなどがあれば記入するよう指示しておく。

## 3回目 4月20日 3. 言葉と本の世界

前回の提出物に朱を入れたものを返却しながら出席を取る。資料#3を配付。

おもに、出典の示し方、引用・要約のしかたを教える。また、書評を活用することを勧める。

授業の最後に、前回の提出物の裏面に書かれていた疑問や悩みのうち、クラス全体で説明すべきことを話す。また、個別に指導が必要なばあいには授業終了後に声をかける。

〔06年度の質問・悩みの例〕メモに集中しすぎて、話の筋がわからなくなる。手が疲れる。ノートをとるな、といわれた授業では……。寝てしまう。眠たいときどうするか。ぐったり。笑いが止まらないとき、どうするか。飲み会で停学はあるか。時間にゆとりができた。休み時間が短い。学舎移動で遅れたときは……。時間の使い方。いつトイレに行くか。教職ガイダンスをもういちど。とりたい授業が取れない。教務はどこで相談するのか。授業のあと、先生はどこに行くのか（質問をしたくても……）。オフィスアワー。基礎研究のテストは……。テストは持ちこみ可能か。一人暮らしのときは何を食べていたか。机・椅子が悪い。椅子が硬い。トイレが小さい。食堂が狭い。電車が混みすぎ。授業料が高い。クラブは授業より大会優先。

〔05年度の質問・悩みの例〕事務室の対応が怖い。教養が多すぎる。専門を早く学びたい。履修登録の期間が短い。クラスの抽選、希望。講義で大人数のものがある。私立に入ったことを後悔。クラス分割をしてほしい。大教室での講義が騒がしい。教員が注意しない。段取りがわかっていない教員がいる。教員の話の内容がわからない。90分が長い。土曜の授業がある。10分の休憩では短い。教科書が高い。自由だが、学生が勉強していない印象。空き時間の使い方。1限がづらい。クラブ・アルバイトとの兼ね合い。テニスサークル。図書館に入れない。食堂が混んでいる。食堂からの持ち出し、放置。関大前通りの交通が危険。年齢がちがう同級生とのつきあいかた。友達づきあい。

4回目 4月27日 4. レジュメをつくる

資料#4を配付。レジュメの作り方を説明。過去の受講生のもの（よい例、悪い例）を示す。また、報告の流れや印刷のしかたなどについても、できるだけ情報を与えておく。

後半は、グループ報告のためのディスカッションをする。司会者、書記役などを決め、全員が発言するように指導。机間巡視（机間指導）によって、グループの議論に加わる、消極的な受講生（フリーライダーの危険性がある者）に注意する。

各班のテーマは複数の候補をつくらせたうえ、順位をつけさせる。授業終了前に書記係に板書させ、他の班との重複がないかを見極める。重複がなければ、連休中に、グループ報告に必要な基礎資料集めをするように指導して終わる。また、この授業でも、悩んでいる受講生に声をかける必要がないかを確認する。

5回目 5月11日

5. 報告をする・討論をする（共同報告のテーマについて話し合う）

資料#5を配付。社会学での「おもしろさ」や、クロス集計をすることの意味、「仮説」のかたちにするものの重要性などを話す。やや時間が不足する。また、いちどに受講生の理解が得られるわけでもない。繰り返すことが重要なので、以後の共同報告に対するコメントのなかでも逐次、補足説明する。班のディスカッションでは、司会と書記をローテーションさせる。

報告に向けての準備で、教員との相談が必要な場合は、オフィスアワーの時間帯での面談指導と、メールによるコミュニケーションを充てる。

6回目 5月18日 6. 共同報告の練習① 1班・2班・3班

グループ報告の練習をさせる。1グループ5分、レジュメ1枚。限られた時間のつかいかたを実際に体験させる。レジュメのつくりにかた配付方法などについても細かく指導する。また、いきなり報告させると、パフォーマンスとしても研究としてもうまくいかない。いちど短い練習をしてから本報告をさせるかたちをとるにいたった。3つの班を1日でまわすので、やや短い。他の班の進捗状況が刺激になり、教育効果はある。

7回目 5月25日 7. 共同報告の練習② 4班・5班・6班

同上で残りの3つの班の練習。とくに、声の張りの弱い学生について、強要しないかたちで指導をする。また、議論の時にも発言のマナーがあることを伝え、つぶしあいではな

く、報告者の研究が建設的な方向にすすむような助言につながるようこころがける。また、机間巡視によって、フリーライダーがないかを確認する。

遅刻者については、学生ポータルサイトで出欠データの集計結果を公開しているので、それで確認するよういう。

8回目 6月1日

8. 共同報告① 報告＝2班 コメント担当＝3班 計時＝6班

9回目 6月8日

9. 共同報告② 報告＝4班 コメント担当＝5班 計時＝2班

10回目 6月15日

10. 共同報告③ 報告＝6班 コメント担当＝1班 計時＝3班

11回目 6月22日

11. 共同報告④ 報告＝3班 コメント担当＝4班 計時＝5班

共同報告は、20分を標準に、レジュメ5～6枚。担当箇所の文責を明記させ、全員がプレゼンテーションを行なう。

アンケート調査（春学期段階では、あえて質問紙調査とは呼んでいない）を実施する班もあるが、未熟なものなので、対象者を学内に限定してある。ただし、調査用のコピーが予算化されておらず、自弁扱いとなっている。この点について学生の理解を得るのがむずかしい。

報告後には、すぐに教員からプレゼンテーションやレジュメの不備な点について指導する。その後、各班で意見を交換させる。コメント担当の班は、全員（6～7名）が、ひとつずつ、質問あるいは意見を言う責任を負わせる。また、内容についての確認、質問からはじめて、その後に意見をいうよう流れも考えさせる。コメント担当班が終わったら、ひきつづき、1つの班から1名が代表質問（意見）を出す。これに対して、報告をした班は、文責にしたがって回答し、必要な場合は、他のメンバーが回答する。

このローテーションで、4週つづける。報告の内容に即して、授業の最後の5～10分を割いて、社会学の基礎概念や、調査方法の考え方、データの解釈のしかたなどについて教員から補足説明をする。授業終了後には、報告担当の班から、さらに指導やアドバイスを求められることが多く、休憩時間に個別に対応する。

12回目 6月29日

12. 共同報告⑤ 報告＝5班 コメント担当＝6班 計時＝1班 交流戦

13回目 7月6日

13. 共同報告⑥ 報告＝1班 コメント担当＝2班 計時＝4班 交流戦

同様の報告をつづけるが、メンバーが固定することで発言者が偏ってくるので、報告の班、コメント担当の班以外の4つについては、メンバーのうち2名を他の班とトレードし、異なった人間関係のなかで発言ができるようにする。グループでのディスカッション、代表質問、個人での受け答え、交流戦、といった段階を踏むことで、秋学期に個人で報告することがあっても対応できると期待できる。また、シャッフルされたメンバーで作業をしても人見知りしない効果もある。

〔報告に対するコメントとして授業中に言及したことから〕

関連する要因を二つのあいだの原因→結果としてだけ考えるのではない。共変関係や、別の変数が両方に影響している可能性も考える。そのためには、要因の連関図を描くことが重要。

促進する要因と抑制する要因、押し出す要因と引き付ける要因といった区別もある。

トートロジー的な説明にならないようにする。

質問には、直接聞きたいことがらにかかわる質問文だけでなく、一般的な意識をきくようなものを含めておくことがコツだということ。自由回答はきちんとアフターコーディングすること。NAとDKでは意味がちがうこと。自由記述と選択肢回答のちがい、選択肢でも択一と複数回答可ではちがうころ。

何よりも、指標の妥当性を吟味する。

クロス集計表の読み方（ただし、カイ自乗値などの話は社会調査関連科目で学ぶと予告するにとどめる）。

(2) グループ作業と個人発表による、基礎概念・比較による研究法・コミュニケーションスキルの習得を中心とした授業計画（担当者：大和）

① 授業計画

	指導概要	指導の方法と工夫
第1回	授業計画の説明、グループ分け	
第2回	資料収集の方法の説明 図書館の利用指導 宿題の説明・練習	宿題は、担当者が課題を用意し、学生がそれをレポートにまとめ、翌週に提出する。
第3回	宿題の提出 グループワークとグループ発表 教材：14章「ジェンダー論の基礎」 主な概念：「役割」「フレーミング」「独立重視／親和重視」「私化」「公的なこと／私的なこと」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宿題は添削して、翌週返却する。その際にも重要なポイントの解説をする。</li> <li>・グループワークは、宿題で各自が考察してきたことをもとにグループで話し合い、グループの代表者が発表する。発表の際には、わかりやすい口頭発表の技術について、逐次解説する。これは次に行う個人発表のための練習と位置づけ、そのように指導する。</li> <li>・ここで学ぶ社会学の基礎概念については、その理解を容易にするために、それぞれの概念を図式化した教材を担当者が作り、教科書と共に説明に用いる。</li> </ul>
第4回	前回の宿題の返却・コメント 今回の宿題の提出 グループワークとグループ発表 教材：9章「近代社会とアノミー」 主な概念：「ゲマインシャフト／ゲゼルシャフト」「自由からの逃走」「カリスマ」「伝統指向／内部指向／他人指向」「アノミー」	
第5回	前回の宿題の返却・コメント 今回の宿題の提出 グループワークとグループ発表 教材：8章「社会の病理」 主な概念：「顕在的機能／潜在的機能」「逸脱」「予言の自己成就」「ラベリング」「構築主義」	
第6回	個人発表(A)(B)の方法の解説 (資料収集の方法、「問い→仮説→分析→考察」という論理的思考・提示の方法、わかりやすい資料提示の方法など)	
第7回	個人発表(A)と質疑応答 発表の課題：「役割」「独立重視／親和重視のフレーミング」「公的なこと／私的なこと」	

第8回	個人発表(A)と質疑応答 発表の課題:「私化」「自由からの逃走」「伝統指向／内部指向／他人指向」「アノミー」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・このやり取りの中で、わかりやすい発表・質問・応答のしかたについて、そのつど指導を行う。</li> <li>・発表後に発表テーマに関する意見コメントを書かせ、翌週にいくつかを紹介する。これを通じてもコメントのしかたを学ばせる。</li> </ul>
第9回	個人発表(A)と質疑応答 発表の課題:「顕在的機能／潜在的機能」「予言の自己成就」「ラベリング」「社会問題の構築主義」	
第10回	個人発表(B)と質疑応答 発表の課題: 比較の方法を用いた自由課題による個人発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1回の授業につき5～6人が、それぞれが選んだテーマについて、時間軸にそった比較、空間軸にそった比較、その他の比較をつかって分析する。</li> <li>・その他の方法については、個人発表(A)とほぼ同じ。</li> </ul>
第11回		
第12回		
第13回		
第14回		

## ② 指導上のねらい

この授業の指導上のねらいは下の□に示した3点である。第1回の授業で学生に配布する授業概要の資料にもこのとおりに明記し、学生が目的意識をもって授業に望めるようにしている。

<p>この授業の目標</p> <p>(1) コミュニケーション力（レジユメの作り方・発表・質問・コメント・応答のしかたなど）を身につける。</p> <p>(2) 「比較」によって社会を研究する方法を身につける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「比較」は科学の最も基本的な方法である。</li> <li>・「比較」によって、自分（自分が生きている社会）を知ることができる。</li> <li>・社会学の教科書や論文も、「比較」によって書かれている。</li> <li>・授業のレポートや卒論も「比較」によって書くことができる。</li> </ul> <p>(3) 「社会学の概念」を使って身の回りの社会現象を分析する。</p> <p>例：ゲメインシャフト、アノミー、ラベリング、他人指向型、逸脱</p>
---

第1の目的は、口頭コミュニケーション・文書でのコミュニケーションの両方におけるコミュニケーション力をつけることである。これは社会学部における教育（さらには社会人としての人生）の基礎となる力であり、すべての授業との連携を意識している。したがって授業のあらゆる場面において、今の発表のしかたはどの点がよかったか、今の質問のしかた・答え方はどの点がよかったか、このレジユメはどの点がわかりやすいかといったことを、繰り返し学生に問いかけ、わかりやすいコミュニケーションとはどのようなものかを自分で考え工夫してもらうようにしている。このねらいについては、授業の最後に学生が書いた次のようなコメントで示すことができる。

「基礎研究の授業を受けて、一番感じたことは、自分の考えていることを他人に判りやすく伝えることの難しさでした。ただ内容を伝えるだけでなく、声のトーンや話すスピードも考えなければならないということを学びました。」

「発表の準備をしているとき、どこの部分を発表したらいいか、どこをレジюмеに載せたらいいか、けっこう悩みました。…4月の頃は『発表嫌だな』と思っていたのが、今では積極的に発表したいなと思うようになりました。」

「他の人の発表を聞いたりレジюмеを見たりしていると、資料（データ）の使い方がうまい人が多い。やはり資料を活用したほうがより発表にも説得力が出てくると思うので、次に発表の機会があったときは、もっと資料を有効に使いたいと思います。」

「質疑応答の場面でも、はじめて質問したときに先生に注意され、コミュニケーションのあり方を学びました。それを考慮して自分の発表でも気をつけるように心がけることができました。」

この授業の第2の目的は、「比較」という方法を身につけることである。「比較」の方法を中心的に学ぶのは第10回以降の個人発表(B)であるが、他の回の課題においても「比較」という方法を使うような課題を設定している。これを学ぶことの意義については、授業の最後に学生が書いた次のコメントで示すことができる。

「この授業で『比較』の大切さを知りました。今まで1つのことを調べる時はその1つのことだけを調べていたけれど、『比較』をすることでその調べたいことがより浮き出てくるのだとわかりました。」

授業連携という点からは、「比較」という方法を学ぶことは、自由課題によるレポートを求められる授業、具体的には各学年に置かれている少人数・ゼミ形式の授業（1年次の基礎研究、2年次の基礎演習、3年次の専門演習、4年次の卒業研究）との連携をおもに念頭においている。これらの授業に備えて、自由課題で研究するときの基礎的な方法を、この導入教育において習得することをねらっている。またレポート試験などの場合にも役立つ

つことをねらっている。

この授業の第3の目的は、社会学の基礎概念のいくつかを学び、それによって社会的発想に触れることである。これはおもに1回生担当の講義科目である「社会学（社会学入門）」や「社会学（現代の社会）」との連携を念頭においている。この連携をより目に見えやすくするために、これら講義科目で使う教科書と同じものを、この授業でも用いている。

### ③ 留意点

(1)コミュニケーション力の向上、(2)「比較」という方法の習得と重要性の理解、(3)社会学の基礎概念の習得という3つの目的を、授業の中で融合させることに留意している。この融合がうまくいくことによって、3つの目的それぞれの達成もうまくいくからである。

また学生の「個人としてのスキルの向上」と「グループとしてうまく機能すること」の両立にも留意している。グループ・ワークに重点を置きすぎると、自分では課題をやっこないフリー・ライダー（ただ乗り）的な学生を生むことになる。それを防ぐために、第3回～5回では個人として宿題を与え、毎回それを添削し、フィードバックしている。さらに授業の後半は個人単位で発表をすることにしている。しかし個人を重視しすぎると、授業からコミュニケーションの喜びが失われるし、主体的なコミュニケーション力も十分には育たない。そのために、グループ・ワーク、グループでの質疑応答といった要素も取り入れている。



(3) 個人発表と基礎概念の習得および比較研究の実習を中心とした授業計画（担当:杉野）

① 授業計画

	指導概要	指導上の工夫
第1回	授業計画の説明・図書館利用指導	
第2回	入門的講義により社会学の基本視点（人間への着目・集団の視点）を習得させる	時間があれば5分程度のグループ討論をさせる
第3回		
第4回	自由課題発表の方法（比較研究）の解説	個人発表分担を決める
第5回	ウェーバーとデュルケームの行為理論の違いを講義する	時間があれば5分程度のグループ討論をさせる
第6回	1. ウェーバー行為類型 2. 機能主義の人間観 3. 役割概念について個人発表	同じ課題について二人に別々に発表させて競わせる
第7回	役割、準拠集団、規範、逸脱、アノミー、逆機能、潜在的機能について講義する	時間があれば5分程度のグループ討論をさせる
第8回	1. 準拠集団 2. アノミー 3. 逆機能・潜在的機能について個人発表	同じ課題について二人に別々に発表させて競わせる
第9回	社会集団の類型概念と社会学における組織研究の概要について講義	時間があれば5分程度のグループ討論をさせる
第10回	デュルケーム、テンニース、クーリー、マッキーバーの集団類型論と官僚制について個人発表	
第11回	自由課題による個人発表	発表後に発表テーマに関する意見コメントを書かせ、授業中に何人か指名してコメントを読ませる
第12回		
第13回		
第14回		

② 指導上のねらい

本授業計画は、1年次春学期という時期に配慮して、「社会学の基礎概念」を習得させることに第一の目的を置いている。その面では、春学期配当の講義「社会学（社会学入門）」との連携を意識している。講義で学習した概念を習得させるには、自ら調べることが大切であり、基礎概念を自分で社会学の入門書などで調べさせて教室で発表させている。これにあたるのが第6・8・10回の「課題発表」である。ここでは、1回6名、合計18名に発表させる。残りの10数名には課題を一つ選んでレポートを提出させ、全員に「基礎概念を自分で調べる」という経験を一度はさせるようにしている。大学における「自習」あるいは「自ら調べる」という習慣は、多くの高校では身につけていないことなので1年次の指

導においてはとくに重要と思われる。

第11回以降は、課題発表をしなかった残りの20名弱が自由なテーマで発表する。ただし、人間に焦点をあて、個人ではなく集団でとらえ、なんらかの比較をおこなうという方法上の条件を出す。これについても、すでに課題発表を終えた18名にはレポート提出を課しており、全員にこの課題をさせるようにしている。個人による発表については、毎回、出席者全員にコメントを書かせているが、前半の課題発表についてはおもに発表技能に関する評価を書かせ、後半の自由課題発表では発表内容に関する意見や知識を書かせるようにしている。とくに後半の自由課題発表では、発表者全員ではなく、そのうち2名を選んでコメントするように指導し、できるだけ内容のあるコメントを書くように誘導する。また発表後に何人かにコメントを読ませて、その場で発表者にフィードバックしたり、「よいコメント」の書き方を学ばせることも重要である。

### ③ 留意点

基礎概念を自分で調べて発表することは大切な作業だと思うが、実際の授業でそれをやらせることはどうしても退屈しがちになる場合があり、ときに、ミニ・グループディスカッションをとり入れたり、いわゆる「お楽しみ」的要素を盛り込む必要がある。

前半の課題発表の指導の力点は、「上手な発表」とはどのような発表なのか学ばせることにあり、発表後の教員のコメントは発表者の「発表の仕方」に集中させる。また、発表後に出席者に書かせるコメントは、学生に「発表を評価する目」を持たせることを目的としている。一方、後半の自由課題発表後の指導は、発表者に対する指導よりも、「コメントの仕方」の指導に力を入れる。そのためには発表後のコメントの配点を前半よりも高くすること、翌週には各自のコメントを格付けした上でよいコメントを発表するなどの工夫が必要である。

図書の調べ方、参考文献の書き方、統計データの引用の仕方などについては、最低限の指導しかしていないが、これらのことがらはかなり時間をさいても定着しない学生が少なくないので、発表やレポートでそのつど注意したり減点するようなきめ細かい指導が効果的だと考えている。

## 資料 2. 2006年度「社会学（現代の社会）」（秋学期 2 単位）の指導概要（担当者：永井）

### 1. シラバス

■講義概要	社会学は、さまざまな社会現象を考えるための「思考の道具」であるといえる。この講義では、近代化と社会、現代文化、家族の問題、犯罪と非行などの具体的なテーマについて、社会学的な研究の枠組やその成果を解説する。しかしながら、より重要なことは、それらの現象をどのように「見る」かである。同じ現象でも、それを見る者が立つ位置によって事態はちがって理解されるだろう。ひとつの現象についても多角的な見かたを重ねていくことによって、社会学的な見かたが養われ、「問題」の本質を見きわめていく力が与えられる。
■講義計画	以下の諸分野から具体的な社会現象をとりあげ、それぞれ2～3週ずつ解説する。 (1) 近代社会の特徴 (2) 現代文化の諸問題 (3) 家族の変容およびジェンダー論の基礎 (4) 犯罪と非行 講義で扱うテーマや講義の順序は、そのときの社会情勢などに言及するため、変更するばあいがある。
■成績評価の方法	期末試験の成績に、授業時間内の小レポート（不定期）の提出状況を加味する。
■教科書	片桐新自・永井良和・山本雄二編『基礎社会学 新訂第1版』（世界思想社）昨年度までとは出版社が異なる新版なので注意すること。
■参考書	その都度指示する。
■備考	授業では、板書に頼らず自分の力で講義内容をノートにとる力が求められる。講義時間内に自分じしんの手でしっかりした内容のノートをつくることを心がけてほしい。（03年度～05年度「授業評価アンケート」満足度項目の平均評価点：4.36）

### 2. 授業計画の実例

#### ① 授業計画

複数担当者がシラバスを共有しているので、上に掲げた講義計画では簡単な記述に抑えてある。そこで、初回に、あらためて個別の授業の進め方について説明をしている。

2006年度秋学期は、春学期の講義を受講して基礎的な概念については理解しているという前提で、社会現象の具体例をとりあげつつ、教科書のうち、春学期に扱っていない章をとりあげてすすめた。

具体的には9章（近代社会とアノミー）、10章（ミーイズム社会）、7章（学歴と社会）の一部、5章（変貌する家族）、8章（社会の病理）の5テーマである。

#### ② 指導上のねらい

秋学期は、ようやく社会学についての興味が育ちはじめる時期なので、幅広い社会現象をとりあげて、多様な解釈のありかたがあることを示し、授業時間内に書かせる課題でも、

「具体例、具体的体験」をとりあげて、「これまでとはちがう解釈」を与えるように指示している。なお、秋学期の基礎研究2では、共同報告型のクラス運営がなされているため、その授業内容との調整は特別にはしていない。

③ 留意点

春学期の授業が概念の説明や学説史に偏っているので、秋学期も抽象的な話題がつかないよう留意している。これは春学期の講義担当者と事前に調整し、分担して役割を受け持つようにした結果である。受講生たちに「つまらない」という感想をもたせないように、できるだけ具体的な社会現象をとりあげること、そのときどきの時事問題を例に引くこと、世界のさまざまな社会のありようを理解させることなどを念頭においている。

### 資料3. 2006年度「社会調査論1」春学期2単位（担当者：間淵）の指導概要

#### 1. シラバス

<p>■講義概要</p>	<p>社会調査には、学術的研究を目的としたものだけではなく、行政の政策決定や、企業の商品開発、顧客サービスの向上といったことを目的としたものもあり、多種多様である。どのような社会調査が存在し、それぞれがいかなる特徴を持っており、どのような点に注意すべきなのかという点について、実際におこなわれた調査を題材にしながら講義していく。社会調査データを正しく利用するための能力、さらには、望ましい社会調査を実施するための能力を身に付けることが、受講者の目標である。</p>
<p>■講義計画</p>	<p>第1回 インTRODクシヨN：講義目的、内容、テキスト、授業日程等の説明                  第2回 社会調査の理想と現実：「怪しい」調査の紹介、社会調査データの探し方                  第3回 社会調査の意義：学問的意義と社会的意義                  第4回 社会調査の歴史                  第5回 社会調査の諸類型 (1)：調査事項による分類（実態調査と世論調査）                  第6回 社会調査の諸類型 (2)：調査対象者選定方法による分類（全数調査と標本調査）                  第7回 社会調査の諸類型 (3)：調査データの種類による分類（量的調査と質的調査）                  第8回 社会調査の諸類型 (4)：調査目的による分類（学術調査、マーケティングリサーチ、行政調査、アクションリサーチ等）                  第9回 社会調査の諸類型 (5)：調査方法による分類                  第10回 社会調査の諸類型 (6)：調査時点による分類（クロスセクション調査、継続調査、パネルサーベイ）                  第11回 社会調査の諸類型 (7)：調査地点による分類（地域調査、全国調査、国際比較調査等）                  第12回 二次データの探し方 (1)：国内の社会調査データの探し方                  第13回 二次データの探し方 (2)：海外の社会調査データの探し方                  第14回 調査報告書の作成法                  第15回 社会調査と倫理：個人情報、人権問題、世論操作、調査の氾濫</p>
<p>■成績評価の方法</p>	<p>定期試験（筆記）の成績で評価する。</p>
<p>■教科書</p>	<p>教科書は使用しません。プリントは、関西大学インフォメーションシステムを経由して配布するので、事前に各自アクセスしてダウンロードand/orプリントしてください。</p>
<p>■参考書</p>	<p>講義に際して、適宜指示する。</p>
<p>■備考</p>	<p>この科目は、社会調査士資格認定機構の「社会調査士」資格を取得するための必修科目です。履修の条件などは、入学年によって異なります。詳細は別に配布する「社会調査士資格の取得について」をみてください。</p>

#### 2. 授業計画の実例

##### ① 授業計画

シラバスの「講義計画」に示したとおりである。

##### ② 指導上のねらい

1年次の春学期の段階では、社会調査にどのようなものがあるのかは勿論知るはずもなく、社会学と社会調査がどのように関係しているのかも大多数の学生は理解していないの

で、それらのことを豊富な具体例で示しつつ教育している。

③ 留意点

この科目は、社会調査士資格認定機構の認定科目であるため、同機構が定めた授業内容を逸脱することができない。しかし、社会調査の歴史や分類に終始したのでは受講生の興味関心を十分に惹くことは困難であると思われるため、学生達の日常生活において身近な事柄や時事ニュースなどと関連づけながら、授業で取り上げる調査の事例を選択するよう心掛けている。また、2006年度までは春学期に開講していたため、度数分布表やクロス集計表の作り方・読み方を説明したり、既存調査の調査報告書や調査データを探すための方法を紹介するといったことにも配慮した。

資料4. 2006年度「社会調査論2」秋学期2単位（担当者：間淵）の指導概要

1. シラバス

■講義概要	社会調査によってどのようにデータを収集し、分析可能な状態にまで整理していくかを、事例を交えて具体的に講義する。
■講義計画	<p>第1回 イントロダクション：講義目的、内容、テキスト、授業日程等の説明</p> <p>第2回 調査の企画と設計</p> <p>第3回 仮説構築の方法：仮説とは何か、仮説の立て方</p> <p>第4回 調査対象者の選定：全数調査と標本調査</p> <p>第5回 標本抽出の方法：単純無作為抽出、系統抽出、多段抽出、層化抽出、スノウボールサンプリング、割り当て等</p> <p>第6回 標本数の決定と誤差：計画標本数の算出方法、標本誤差・非標本誤差</p> <p>第7回 質問文の作成方法：仮説・質問事項・質問文の関係、ワーディング</p> <p>第8回 選択肢の作成方法：尺度構成法</p> <p>第9回 調査票の作成方法：質問・選択肢の配列、フェイスシート、調査票のレイアウト等</p> <p>第10回 世論調査におけるDK・NAの特徴</p> <p>第11回 調査チームの管理方法</p> <p>第12回 調査実施上の注意点：調査票の配付・回収方法、対象者へのアプローチならびにインタビューの仕方等</p> <p>第13回 調査データの精度：調査不能ならびに非回答への対処法</p> <p>第14回 調査データの整理：エディティング、データクリーニング、アフターコーディング、コードブック</p> <p>第15回 まとめ</p>
■成績評価の方法	定期試験（筆記）の成績で評価する。
■教科書	教科書は使用しません。プリントは、関西大学インフォメーションシステムを経由して配布するので、事前に各自アクセスしてダウンロードand/orプリントしてください。
■参考書	講義に際して、適宜指示する。
■備考	この科目は、社会調査士資格認定機構の「社会調査士」資格を取得するための必修科目です。履修の条件などは、入学年によって異なります。詳細は別に配布する「社会調査士資格の取得について」をみてください。

2. 授業計画の実例

① 授業計画

シラバスの「講義計画」に示したとおりである。

② 指導上のねらい

質の高い社会調査を実施するにはどれだけの労力と注意が必要となるのか、そして、世の中で実際におこなわれている多くの調査がいかに杜撰であるのかを理解させることを狙いとしている。

③ 留意点

社会調査論1が調査の歴史や類型論に偏っているので、実際に調査を行う際に必要となる知識と技術について具体的に講義している。

—2007.11.29受稿—